

# 大麻の栽植密度試験

町田博, 上原淑助, 倉嶋留次郎,

目的 大麻の生育, 収量及び繊維の品質に直接影響することの大きい栽植密度の当地における基準を得るため。

播種期も当然その重大な要素であるが, これについては前年の試験で結論を得たので, 本年度は密度についての試験を継続した。

試験地 学部内実験農場と学外東部町和区の大室農場の2ヶ所

試験区 畦巾の広狭により次の4区を設け, 両試験地とも1区2坪の2連制とした。

区	畦 巾		株 間	1 区 当 施 肥 量		
A 区	15 cm	(5寸)区	9~10cm	硫 安 300g	過 石 235g	塩 加 81g
B 区	25	(8寸)区	"	"	"	"
C 区	35	(12寸)区	"	"	"	"
D 区	45	(15寸)区	"	"	"	"

品 種 長野在来

播種日 学内農場4月27日, 大室農場4月27日,

発 芽 企上5月4日, 企上5月8日, 間引は5月下旬と6月上旬の2回行い, 2回目に所定の株間とした。

収 穫 学内農場8月5日, 大室農場8月13日,

調 査 発育形態は何れも収穫時に行い, 収穫した生茎は葉を落して天日乾燥とし, その乾茎を後日煮熟法により製織して収量をみた。

成 績 生育形態 (30個体平均)

試験区	草 丈 cm	第1分枝迄 の茎 長cm	幹太さ mm	生茎重 g	節 数
学 内 農 場					
A 15区	286.5	154.5	14.2	195.0	20
B 25区	312.5	150.0	16.0	265.0	22
C 35区	319.0	139.5	16.2	324.0	22
D 45区	324.0	129.5	19.7	452.0	24

### 大 室 農 場

A 15区	259.5	208.3	11.5	106.7	—
B 25区	266.8	199.6	12.5	126.7	—
C 35区	279.3	197.2	13.1	150.0	—
D 45区	260.7	151.9	14.2	180.0	—

備 考 (1). 各区30個体の平均値である。

(2). 幹の太さは根際刈取部より30cm上部測定値である。

上表より、生育形態を先づ、学内農場と大麻の栽培適地である高冷地大室農場で比較してみると、

大室農場では大麻の生育に好適な立地条件を備えているだけあって、草丈は学内農場より劣るが分枝がおそく少なく、茎長は長く、幹も細く、即ち繊細な生育を示し、麻栽培の理想的な形態のものができた。

次に各区間の差異をみると、両試験地とも草丈においては僅かな差しかみられないが、第1分枝までの茎長即ち有効茎長は、A、B、C、Dの順に短くなり、栽植密度の高い程優れている。幹の太さ、生茎重はA、B、C、Dの順にその量を増し、粗大となっている。

次に収量をみるために、調査30個体の総量で示すと下表のようで、皮麻重は各区とも学内農場では大室農場より5割内外多いが、採織歩合は反対に約 $\frac{1}{2}$ である。この皮麻重を基本にして反当収量を計算してみると、両試験地の収量差は大きくなる。

#### 収 量 (30 個 体 総 量)

試 験 地	乾 茎 重 g	剥 皮 麻 重 g	採 織 歩 合 %	皮 麻 重 指 数	反 当 推 定 収 量 kg
学 内 農 場					
A 15区	2,740	270.0	9.9	100	56.7
B 25区	2,338	322.5	9.2	119	45.2
C 35区	4,605	412.5	9.0	153	41.3
D 45区	5,975	430.0	7.2	160	34.4
大 室 農 場					
A 15区	1,077	188.0	16.5	100	39.5
B 25区	1,292	215.0	16.6	114	30.1
C 35区	1,540	263.0	17.0	140	26.3
D 45区	1,899	296.0	15.6	157	23.7

註、反当推定収量の計算は坪当個体数をA区210、B区140、C区100、D区80として求めた。

更に各区間を比較してみると、前記生育状況と平行して、栽植密度の高い程剝皮麻重は少なく、密度の粗いD区の如きは密度の最も高いA区より6割近い増加がみられた。

しかし一定面積の個体数はもちろんA、B、C、Dの順に少なくなるので、反当収量を推定してみると、密度の高いA区が最も多く、順次B、C、Dと少なくなっている。採織歩合は各区間には大差はないが、密度の高い方が歩合が高く、密度の粗い方が低いことがうかがえる。

なお品質については手繰りによる程度では密度の高いA区のものが最も柔軟で色折もよく、B、C、D区と順に劣っていた。

前年の試験結果と一致した結果で、従来大麻栽培はB区の密度が普通とされていたが、この結果からA区の密度で栽培する方が、収量、品質の両点からみて得策であると考えられる。